

## はしがき

凡そ日本の藝術のうちで、その發達の歴史において、舶載の外來思想に、些の影響をもうけず、純粹に國民性に培はれてのみ來たものは、我が人形淨るりと茶の趣味とであらう。而してこの二つのものは、泉州堺の人士によりて、發祥し或は興隆した藝術である。私は泉州堺の産である。

かうしたハッキリとした意識から出發したのではないが、人形淨るりに特に關心を持つて茲に二十一年。八年前の大正十二年一月二十四日といふ、私の四十一回目の誕辰に、高血壓にて餘命暮年を出でざるべしと、醫師の注意をうけた。俚俗にいふ男の大厄のその年であつた。死に直面して、爾來一切の口舌の慾を去つて僧坊裡の生活をして來たが、三年前、昭和二年十一月八日再び「死」に直面した。輕微であつたが、腦溢血と診斷されて二ヶ月を天井を眺めて暮

した。或時はもう廢人となるのではあるまいかと暗い影に襲はれた。

この病床から、私は「私の墓」を築いておかうと覺悟した。「私の墓」といふのは、私がこの世に生れた足跡をこの世に残したいといふ希望の意味であつた。生きようとする私の執着が可なり、見苦しいほど強かつたことを、今でもまぎ／＼と思ひ浮べる。

「私の墓」は、多忙なる操觚の業に携りながら、二十一年來關心を持續けた人形淨るりに關して、未だ一冊の歴史もない事に想到して、茲に「私の墓」を築かうと決心した。私の病は、大阪醫科大學第二内科長小澤博士と、主治醫なる笠原國手との懇切にして周到なる投藥によつて、私は蘇つた。そして病の愈るを待ち、二十一年來耳聞目睹した人形淨るりの資料の整理に取かゝり、閑地に就いてこれが完成を急ぎつゝある。

私の「人形淨るり史」は、まづ近世から始めて倒敘の體裁を採らうとする。そして最初の卷は、五代目竹本春太夫が江戸に下つた天保五年に筆を起し、大正十一年二月三代目竹本越路太夫が引退の舞臺を以て、筆を歛めようとする。この五代目春太夫は泉州堺の産である。三代目

越路太夫も亦堺の出身である。因縁の浅からざるを、私かに喜びつゝ、今、筆に鞭つてゐる。

ところで、爰兩三年來、若い人々が、俄かに人形芝居に興味を持ち出した。それにはいろいろな理由もあらう、或は氣まぐれなものもあらうが、塵に埋れた人形芝居に興味が繋がつて來たことは事實である。が、元來大阪といふ商業都市に猥雑なる發達を遂げた娛樂機關であるからこれらに關する文献は極めて乏しい。皆無といつていゝ位である。今俄かに、人形芝居の本体を捉まうとしても、足掛りすらもがない。

この故を以て先年雜誌「演藝畫報」に、「人形淨るり」の入門書を連載せよとの委囑をうけたのと、當時東京にて人形淨るりに關する誤れる事實、觀察の我れは顔に横行するに慨して、人形芝居のほんの「INTRODUCTION」を連載した。この「演藝畫報」の記録を基礎として、兩三年來書捨てた人形芝居に關する私の記録を整理し、足らざるを新たに補つたのがこの書である。故に文體が一樣でない、不體裁な事となつた。

——しまつた！　こんな事は讀者に述べべきでなく、私個人のメモであつたのだ。が、本書

の成る所以を記し、私の「近世人形淨るり史」の餘瀝が、この「人形淨るりの概論」となつたのであることを書いておく事も、あながち不用でもあるまいか。

唯寡聞にして涉獵盡くさず、錯誤があるかも知れぬ、吾澤山あらう。が、然し私は些の誤魔化しの記録は斷じて書いてゐない事を、私自ら安心して、公言する欣びを持つ事を、茲に記しておきたい。

昭和五年六月十四日 夜半

泉州堺なる寓居にて

石 割 松 太 郎